

山と博物館

第45巻 第4号 2000年4月25日

大町山岳博物館

特別展 ～信州 野の花・山の花～
植物写真クラブれんげそう写真展 4/16(日)～5/21(日)



ミズバショウ

撮影 茅野 好雄

開催にあたって

茅野 好雄

二月の雪もまだ消えきらないのに土の見える日だまりには、もうオオイヌノフグリが、り色の小さな花を咲かせていました。気がつかなければ見落とし、踏みつけてしまう路傍の花達を見るたびにその美しさに感動してしまふ。園芸の花にはない素朴な野山の花に魅せられて十余年、レンズを通して見る花に詩情を感じます。

セツブンソウが咲きフデリンドウ、カタクリが咲いてもう四月、蜜蜂が、モンシロチョウが、花の蜜を求めて集まる様に、私たちの仲間も花の妖精の美しさを求めてレンズを向けてきました。ファインダーを覗き感動しながらシャッターを切る。これが私たちの最高の幸せです。

私達仲間が花を撮るきっかけになったのは、平成元年に、植物写真家 夏梅陸夫氏が主宰した日本植物写真クラブ長野支部が始まりました。氏の作品は、ただ花を撮るだけでなく、日本的に、洋画的に、見つめていると詩を、物語を感じさせる魅力がありました。その後、四年前に氏の意向で独立し、植物写真クラブ「れんげそう」として発足、ここに「信州 野の花 山の花」と題し、ここ大町山岳博物館で写真展を開催する事になりました。毎年、通い慣れた野山にも年々花が少なくなっていく事が本当に残念に思います。日本の、信州の、素晴らしい大自然を後生に残していきたい。それが私達に課せられた宿命だと思えます。これからも、そう念じながら、私も、仲間もシャッターを押し続けていくつもりです。

ご来観ありがとうございます。

(植物写真クラブ「れんげそう」代表)

信州 野の花・山の花

植物写真クラブれんげそう写真展

「植物写真の魅力」

市川 憲一

花がきれいに咲いていることを祈って、朝の冷気の中を歩く。道の端に、小さな白い花がひっそりと咲いている。

雪解けの冷たい水の中で、自分を主張する白や黄色の花がある。

それだけでも十分に魅力的なのだが、花と同じくらいの高さにカメラを構え、ファインダーを覗いてみると、そこにはいつもの目の高さから見る景色とは全く別の空間がある。

その味を一度知ったら、たぶん、病みつきになってしまう。

晴れていれば晴れているときの、曇りの日は曇りの日の、雨降りには雨降りの、雪降りには雪降りの風情がある。

その風情の中に植物があると、風情が助長されて益々魅力的になる。

カメラを携えてさえいけば、その魅力的な空間を切り取って一人占めにすることができ

る。何ものにも代えがたい楽しみではある。

「花の名前」

高橋三重子

シヨウジョウバカマという名の由来は、この花の色合いが狸々(オランウータンの日本名)の顔色に似、葉の付き方が和服の袴に似ているところからきている。まことに凝った名称であるが、この花にふさわしいように思う。雪解けを待ちかねて春を告げる花でもある。

以前、大町に住んだことがある。大町は岳の街ともいわれ、山登りには格好の地である。ある夏、友人達と餓鬼岳に登った時のこと、同行の友人が花の名前に詳しく、花がまだ咲いていないものまで、知っていたので驚いた。登山道で見つけた花の名前を相互に言い当て



ミツガシワ

市川 憲一



シヨウジョウバカマ

高橋三重子

ながら、登ったことが懐かしく思い出される。花の名前は花の咲く時期にちなんだもの(節分草)、花や葉の形をみたててつけたもの(イカリソウ、ツクバネソウ、マイヅルソウ、マムシグサ)などいろいろある。花のイメージが悪く、嫌われそうなものもある。

六月の残雪の頃、小谷温泉から雨飾山に登った時、雪解けの中から二輪のシヨウジョウバカマが紅紫の花をつけ、私を迎えてくれた。

「草花を撮る」

稲垣 文彦

私たちの住んでいる信州は山々に囲まれ、山野草が豊富で、四季を通して美しい草花が咲いています。しかし、近年は地域開発の名のもとに破壊がなされ、目を追う毎に草花が少なくなっていることに淋しい思いがし



ヤマオダマキ

稲垣 文彦

ます。私たちは十年ほど前から、この厳しい山野に自生し、風雪に耐えながら、毎年美しい花を咲かせる草花の清楚な姿に感動を覚え、これらの草花の風情を主観的に撮影し、そのための技術向上を目指してまいりました。自然界に生きる可憐な一本の草花の写真に、心の安らぎを得てもらえれば本当に幸いです。今後は、個々の花の美しさと共に「植物風景」という地域の背景も入れた写真を撮って行きたいと考え、一層の努力をしています。

「そんな写真を撮ってみたい」

青柳 高弘

自分が花の写真を撮る上で目指していることがある。

花のほんとうの匂は実は大変短いものがほとんどで、休日がうまくあわず、1週間遅れてしまっただけでも生き生きとした姿を撮れないことがある。気象はさらに融通が利かず、薄日の下で写したい、真つ青な空を背景にとりたい、小雨の中で撮りたいと思っても、自分が望んだとおりの状況にはそうそう恵まれない。撮り逃したら、一年待たなければならぬ。匂に巡り会い、気象に恵まれ、絶好の条件が揃っても、気に入らな写真が撮れるとは限らない。日の出から夕焼けが空を染め上げるまで歩き回り、何かットも撮影しても、思いどおりの絵が撮れないことは決して珍しいことではない。そしてまた一年待つ。次の年も撮れなければまた一年待つ。こうして気に入らな絵を数年かけて追う。撮影を始めて十一年が経ったが、未だに撮れないでいる絵



青柳 高弘

が沢山ある。撮れたら撮れたで同じ花でも違う絵を狙いたくなる。つまり花の種類だけ撮りたい絵があることになる。

幾重にも重なったそんな思いの渦に巻き込まれ、その流れのなかでもがき続けている。しかし、それは心地よい苦痛であり、楽しみである。そして、こうしたものがきの中からもみ出された作品に、一言「いいね」と言ってもらえたら、それは至上の喜びにかわる。

煌びやかでなく、派手でなく、どんなに苦勞して撮ったとしても、見る人を強制しない、眺めているうちに語りかけが聞こえてくる絵画のような作品。そんな写真を撮ってみたい。

「一人静」

岩淵 眞美

木漏れ日の差す雑木林を歩く。突然足元に枯れ葉を押し分けるように白い花穂の一人静を見つめる。思わずシャッターを押す。ふと目をあげると、あちらこちらの落葉の陰に白い穂が見える。嬉しさと感激で夢中で撮る。前々から一人静に心を惹かれ苗を貰い、我が家の狭い路地に二人静と共に植え、毎春芽の出るのを楽しみにしていたが、この群生には驚きと感動の一言であった。艶やかな生き生きとした葉の姿、自然の中にあつてこそ美しい。

私がこの花に惹かれたのは、植物学者の山崎先生が「林の中に白穂をして咲く物静かな姿が、吉野山で義経を偲いながら舞を舞った静御前の姿に似ているから、吉野ではヨシノシズカと云われている」と話されたため、静御前が思い出された。これからも自然の美

しさを味わいながら、それぞれ草花のもっている心と詩的な美しさを思いながら頑張ろう。



ヒトリシズカ 岩淵 眞美

「春の予感」

田中 清香

楽しい思い出を雪の中へいっばい埋めておいたから、春にはその思いが伝わって、息のむような花がきつと咲きます。

数年前、思い出すと笑ってしまうのですが、啓蟄の日、雑木林の中へ朝の散歩に出かけました。木々は丸裸で、足下の落葉は私が踏む度にガサガサと音をたてます。しかし、その中に違う音が入ってきました。ザワザワと・・・心は張り裂けんばかりにドキドキし始めました。啓蟄の日と意識していたものから、きつとこれは虫たちの這い出す音に



セツブンソウ 田中 清香

違くない・・・まさかとは思うものの誰かに教えた、そう思った時は林の中を走り出していました。でも、ほんとうはとも恐かったです。勇気をだして一度だけ止まってみました。足音は消えたというのに、一面の枯れ葉からザワザワ、ザワザワと、音は大きくないのだけれど、すごい量の音。林の中を一目散に駆け抜けました・・・すると、道路がポツポツと湿っていて、手を広げれば雨を感じます（そうだよ、虫たちがそんな騒ぐ訳がない）。それでも、私の心はまだドキドキで、この思いを誰かに聞いてほしかった。そして、今年の啓蟄の日（あの事件以来、私は毎年この日を意識しています）、発見しました。土がモコモコと持ち上がるのを（たぶんカエルでしょう）。今年も春がやって来たのです。

春のスタートボタンはいつたい誰が押すのでしょうか、一斉に花が咲き始めました。

「早春の再会」

原 洋一

長く厳しい冬の寒さに耐え、早春を待ちこがれていた、いじらしくも誕生したばかりの山野草との出会いが再び・・・あの愛らしいハルリンドウ、オオイスノフグリ、そして規律正しいカタクリが今年も待っていてくれた。でも、一番会いたかったのがユキノシタだった。アップ以外では情感を読みとれないユキノシタには、柔らかい肌似合うレンズを向けてみる・・・花びらはそれに応えてくれるような、山野草ならではの風情ある姿



ユキノシタ 原 洋一

を満たしてくれていた。しかし、カメラの方が少しご機嫌斜めのようになっていて・・・

「花の写真は難しい」

竹内 哲昭

写真は難しい。特に、花の写真は被写体が動かないから（逆に風には苦労しますが）、その表情をどう表現したらよいか、ファインダーを覗きはじめるとまだ日の浅い私にはとても難しいことです。それは撮る人の感性によって変わります。自分はまだまだそこまでわかりませんが、この植物写真クラブに入会するきっかけとなった植物写真家 夏梅陸夫氏のような風情ある花の写真を私も撮ってみたいと思っ



エゾノコリンゴ 竹内 哲昭

たことは確かです。

私はまだ花の名前をあまり知りませんし、ただ綺麗だからと思ひ撮影しているだけの気もします。今回出品したエゾノコリンゴ、ニセアカシアなど、見た人がどう思うのか私には見当が付きません。これから先、まず自分でこれはいいなど思える写真が撮れるよう、そう感じられるように感性を磨いていくことが私の第一歩です。

植物写真クラブれんげそう写真展

大町山岳博物館

二〇〇〇年四月十六日(日)～五月二十一日(日)

午前九時～午後五時

(入館午後四時三十分まで)

入場料 大人 四〇〇円

高校生 三〇〇円

小中学生 二〇〇円

■出品者

- 青柳 高弘 岩渕 眞美 田中 清香
- 市川 憲一 竹内 哲昭 茅野 好雄
- 稲垣 文彦 高橋三重子 原 洋一

■事務局

〒三九九一八三〇三
徳高町大字徳高五二〇一―一 青柳高弘

TEL 〇二六三(八)二四八四

E-mail comptch@ca.mh.or.jp

資料の寄贈ありがとうございました

平成一一年度、博物館収蔵資料充実のため次の資料を寄贈いただきました。

- 写真1点……………横浜市 大石高志
- 釜底登山靴1点……………岡谷市 征矢 弘
- ワックス1点……………岡谷市 丸山博之
- 書籍13点……………東京都 勝浦健二
- 書籍79点……………瀬戸市 加藤一満
- 写真1点……………大町市 沼田 泉
- 銃弾製造器具2点……………大月市 百瀬晃喜
- ハバキ、ネツエ等5点……………上田市 倉科訓之
- 山川勇一郎作絵画1点……………横浜市 日塔笑子
- 書籍72点……………大町市 齋藤忠彦
- 山岳用テント1点……………東京都 薄根義信
- 森谷製ビッケル1点……………横須賀市 岩田敏郎
- スイスアルプス博物館収蔵山岳資料 226点
- 展示用ガラスケース 7点

東京都 スイス政府観光局

(以上、敬称略)

人事異動のお知らせ

平成一二年四月一日付で五十川眞館長が大町総合病院事務部医事課へ転出し、新たに倉科和夫が館長に就任いたしました。

山と博物館第45巻第4号

発行 長野県大町市大字大町八〇五六―一

大町山岳博物館

TEL 〇二六三(八)二四八四

印刷 大糸タイムス株式会社

定価 年額一、五〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号 〇五四〇一七二二九